

ルポ 母の異変に苦悩する娘たち

認知症の初期症状—— 嫉妬妄想を知っていますか？

生真面目な母親がある日、
「お父さんが浮気している」とつぶやいた。
老いの入口に立つ親を襲ったものとは

取材・文◎^{よこやま}横山ゆきえ (フリーライター)
イラスト◎松本圭以子



『どうして『このおばあさんは痴呆だっ
たかも』と考えつかないんだろう。色ポ
ケ扱いして、冷やかすばかりで……』
朝のワイドショーにひととき見入って
から、葵さん(38歳)は歯痒くなった。
昨年11月、寝ていた夫(80歳)の頭を
妻(82歳)がマサカリで殴り、殺人未遂
容疑で逮捕される事件があった。『夫が浮
気をしている。憎らしくて殺そうと思っ
た』と妻が供述。昔話がかったマサカリ
が凶器に使われたためか、そのニュース
はどこか面白おかしく伝えられたようだ。
『番組では、認知症(痴呆症)の嫉妬妄想
という症状の存在をまったく知らないよ

うでした。そこを取り上げてくれたら、
認知症の初期段階への対応に失敗する家
族も減るのではと思ったのですが……』
確かにこの妻はその後、「認知症の疑
いがある」とされ、責任能力の有無を調
べるため鑑定留置された。この件に葵さ
んが敏感だったのは、実母の姿が浮かん
だからだ。母は「認知症の初期症状とし
ての嫉妬妄想」と診断されている。

母と父の言い分、 どっちがほんとなの？

「お父さんが、浮気しているの」
70歳になる母がそう囁いたのが、始ま
りだった。もう3年になると、葵さんは
言う。夫と娘の3人暮らしの彼女は、両
親が住むマンションの近くに住んでいる。
「父がマンションの管理人と浮気して
る」と、母は言うんです。その根拠を母はい
ろいろ挙げるけど、決定的証拠はなくて「
突拍子もない話と思った。とはいえ、
昔から口数は少ないが朗らかだった母が
嘘をつくとも思えない。表情も真剣、憤
りで身体が揺れそうな様子だ。だが、
父に質せば「そんなことしてない。信じ
られないのか？」と言う。これまで浮気
話は皆無の人で、こちらも嘘とは思えな
い。どっちがほんとなのだろう。
「当初は調査会社に父を調べさせようか
と悩みました。でも、『女がお父さんの財
産を狙っているから、お前が預かって』
などと母の話はどんどん広がってゆく。

理屈で反論すると「私を信じないの?」と母に怒鳴ら
れ、怒るし、どうもおかしいなと思って
何かの病気だろうか。インターネット
で情報を集めた。某女性向けサイトの掲
示板に「困ったなす」の名で事情を書き
込み、「父が浮気? 母の妄想? 一体
どっち?」母が病気かどうか、調べる
方法は?と問いかけると、(そんな母
を20年見てきた)《家の母も全く同じ。
両親は離婚してしまつた》と、同じく
悩める母を抱える娘、たちの嘆きが集
まつた。《母が頑として病院に行かない》
悩み、《更年期障害のうつ症状》《統合失
調症》と診断された話もあった。葵さん
のお母さんについて、《アルツハイマー
の症状》《嫉妬妄想症》ではとの指摘も
あったが、わが母のこととも思いかねた。
なぜなら母はごく普通に家事もしてい
るのだ。「実はお父さんは、過去にも浮
気した」と語りだしていた。それがほ
んとうなら、母の激情は何か脳の病気と
いうより、積年の父との関係性によるも
のかもしれない。葵さんが思いを巡らす
傍らで、母の繰言は激しくなっていた。
「だんだん嫌気がさして、母を避け始め
たんです。すると『あんたも結局、お父
さんの一味なのね』と言われて……」
娘の自分まで疑いだした母に衝撃を受
け、母の主治医に内々に相談した。検査
を勧める形で総合病院へ紹介するよう頼
んだが、主治医は母に「娘さんが言うの
で、脳の検査を」と言ってしまった。紹
介された精神科に付き添おうとすると、
「先生にまずいこと言われちゃ困るから、

口封じについてくるの?」と母に怒鳴ら
れた。処方された薬で母の興奮は少し落
ち着いたが、妄想は消えなかった。

《母の拒絶反応を見たくなくて、ビクビ
クしています》。気持ちのはけ口を求め、
葵さんは掲示板に書き込み続けた。自分
のホームページ「母が変! 被害妄想で
信じてもらえない!」も立ち上げた。悩
みを分かちあえる場を、つくりたかった。
半年ほど後、母は認知症の初期症状と思
われる嫉妬妄想」と診断された。嫉妬妄
想という何やら強烈な名が今の母の状態
を表すのとはかく、痴呆とは……。

予期しない方向から撃たれた感があつ
た。痴呆にそんな症状もあることは本で
読んで確認していたが、ことが母は普
通に見えたのだ——あの激情を除けば。

かわいそつだった母が 今は疎ましい

広辞苑で「妄想」を引くと、そこには
二つの意味が記されている。まずは「み
だりなおもい。正しくない信念」「みだ
り」は筋道の立たぬことで、これは私た
ちがふだん使う「妄想」の意味に近い。
二つ目は「根拠のない主観的な想像や
信念。病的原因によつて起こり、事実の

経験や論理によつては容易に訂正される
ことがない」。精神科医の使う「妄想」

はこの後者にあたる。話す内容がそう荒
唐無稽でなくとも、本人が確信して訂正
が一切不可能であり、生活に支障が生じ
たとき、それは妄想と呼ばれ得る要素を
含む。だから妄想を抱く人の話を否定し
たり、「それは違う」と説得したりする
のは無理な話。本人はもつと頑になる。
しかしそんな「妄想」の第二の定義を、
私たちはどれだけ知っているだろう。

《最近また母がとんでもないことを父に
言つたため、ひと騒動ありました。最初
はかわいそうに思つていた母に対し、最
近は疎ましくなり腹が立つてきました》
葵さんのサイトに「あつこ」の名でこ
う書き込んだ桜さん(47歳)は既婚者で、
両親は二人暮らし。明るくて生真面目な
母(76歳)に、変化は起きた。父は40年

前、2年ほど家を出て女性と同棲したこ
とがある。離婚話を母が蹴り、父は家に
戻ってきた。
「母は不幸でした。経済的な不安と子ど
もを取られたくないという理由から、離
婚を断つたからです。父には気を遣い、
食事子どもたちより一品多くしていま
したが、夫婦らしい会話もなく、父は母
に冷たかった」と桜さんは言う。

15年前に母は「何もする気が起きない」
「お父さんが腹立たしい」と訴え始め、
桜さんが受診を勧めた総合病院の神経科
で処方された抗うつ剤を飲み始めた。

言動が激化したのは5年前から。毎晩
桜さんに電話をかけてきては「あの顔は、
女と会つてきたのだ。間違いない」と大
声で訴える。父と女性との縁ははるか昔
に切れている。だが母はその事実を認め
られず、父に女性関係を問い質すよう、
桜さんへ繰り返し頼み、断られるたび激
昂した。一度だけだが、「あの女を殺し
て、私も死ぬ!」と電話してきて、刃物
をしのばせ出歩いたこともある。かと思
えば、「部屋の時計がみなずれている」
のは夫の嫌がらせ、「私の○○が見つか
らない」のは夫が盗んだからと、何にせ
よ非難の矛先は父(夫)に向けられた。

そんな母の症状は、「うつ」ではなく
「嫉妬妄想」ではないのか。最初にそう
気づいたのは、母の担当医ではなく、桜
さんが自身のうつ状態を相談した別の精
神科医だった。「医師の前では、お母さ
んはまったく別の顔をしているかも。家
族が現状を伝えたほうがいい」と勧めら
れた。母の担当医に尋ねると、診察室で
の母は「主人は相変わらずです。いつも
の薬、くっさい」と呟くだけという。「女
を殺す!」と叫ぶ姿など想像だにせず、
担当医は抗うつ剤を出し続けていた。

桜さんは母を転院させ、以来、自分も
医師に会い母の状況を伝えてきた。検査
のすえ母は、「やはり、認知症が大きく
絡んだうえでの、嫉妬妄想、被害妄想と

毎晩電話で父の浮気を訴え、 「あの女を殺して、私も死ぬ!」と 刃物をしのばせ出歩いたこともある



「いうほうが説明がつく」と診断された。抗うつ剤から精神的諸症状を抑える薬に切り替えたことで、母の興奮はかなり収まったが、妄想は消えていない。桜さんも、疲れてきてしまった。《我慢も限界になって、ついきつい事を言ってしまう。すると罪悪感みたいなのがあって、気持ち落ち込んでしまう……》。

すべてのストレスが爆発した感じ

《先日主治医から、機能テスト等の結果では痴呆の数値ではなかったこと、MR Iも1年前とさほど変わりがなく顕著な（脳の）萎縮もなかったことから、痴呆以外の病気が疑いましょうといわれました……テスト結果がよいといつて喜ぶこともできず、また痴呆でないとしたら精

神的な病気なのか……混乱しています》

葵さんのサイトにこう書いたひかるさん（35歳）は、夫の母親を見つめているこの書き込みのあと、診断は「痴呆」に戻ったという。義父と二人暮らしの義母は、2年前に胃痛を訴えた。主治医に紹介された心療内科では「うつ状態」と診断された。やがてもの忘れや義父への嫉妬・被害妄想が始まった。

義父に浮気歴はないらしい。ただ、義父の酒癖の悪さ、その親兄弟の面倒で義母が苦勞を重ねたのは、周知の事実だった。今、義母は苦勞を何度も語り、「最低の人間！早く死んでくれ」と夫に怒りをぶつける。しかしその夫が出かければ、「女のところへ行ったら」と訴えるのだ。若い頃の義母はおやつも服も手づくりで、息子だけでなくその友達も大切に、近所でも人気者だったらしい。いまは

「すべてのストレスが爆発」した感じで、息子（ひかるさんの夫）が調整に走る。

「母がこうなったのは父が追い詰めたせいだ」と、うちの夫は言います。たしかに義父は、義母の目の前で『ボケちゃって、ほんと困るよ』と言うなど言動がきつい。実際、義母も苦勞させられたようです。でも、買い物先で妻の好物を探す義父を見ると、私はつい弁護しちゃう。家族の歴史って、外からは窺い知れない部分があります」

一方、最初に紹介した葵さんの母の妄想はさらに深まり、夫と娘を「敵」と認識し続けている。母を外出に誘えば、「留守中にあの女を家に入らせて何するの？」と疑われてしまう。不眠症なのに、たまにぐっすり眠れば「眠らされた」、自分の身体に「ICチップが埋め込まれて操作されてる」と訴える母に、心底疲れてしまう。でも本人はもつと疲れているだろうとも思うのだ。

「認知症だと、妄想だと、早い段階で、娘の私自身が気づいていたら……」

葵さんが悔いているのは、この一点だ。「認知症の初期症状としての妄想」という診断は、横に母を座らせたまま、医師が葵さんに伝えた。母が「妄想ではない、事実だ」と反論すると、医師は母と口論を始めた。そんな心ない対応が母を傷つけ、ひいてはその医師へ誘った自分への不信感が固定されたのではとも感じてしまう。「私が娘として信頼されていれば、少しは母の力になったのではと思うんです」いまや母は「居たくて居た家じゃない」。

帰る所がなかっただけ。私は不幸だった」とさえ言う。「一番頼りたい人に向け、妄想は出ると聞きました。だから父と私

がその対象になった。そう解釈するしかないですね」と葵さんは溜め息をつく。そのように疎んじながらも、父のそばを母は片時も離れようとはしないのだ。

ただ思えば、自営業の両親は昔から日がな一日ひとつ屋根の下にいた。幼い頃、休日には両親と出かけて楽しんだ。幸福な家庭と思っていた。お母さんだって、楽しそうにしていたじゃない」と娘として言いたくなる。わからないことだらけだ。

頑張り屋の自立型人間ほど

なぜ、老いの心に妄想は生まれるのか。妄想や幻覚はいつ誰にでも起こり得るが、身体が衰えへの不安や、喪の寂しさを抱えがちな高齢者には起こりやすい。そして高齢者の嫉妬妄想の背景によくあるのが認知症だと、『老人解語』の著者、川崎清嗣・川崎メンタルクリニック院長は言う。

「認知症で内的世界が崩れ始めると周囲の見え方も変わり、人は漠たる不安に包まれるでしょう。また認知症で心の抑制が外れ、長年の人間関係で抱え込んだ思いが顕在化する場合もあるようです」

嫉妬妄想は、大概が老夫婦の二人暮らしで、夜に症状が出ることが多いので、周囲に知られにくい。盗られ妄想（モノの置き場を忘れた高齢者が、盗られたと言



が悩むという激しい疲労感や抑うつ症状。これら諸条件の中に立ち現れた一人ひとりの個性ある物語として、小澤さんは認知症の周辺症状を捉えている。大量の薬や行動制限で抑えるより、心に添うケアで治せるはず、とも説く。

そして、介護職の立場から独自の痴呆観を展開する三好春樹さん（生活とリハビリ研究所代表）も、高齢者の妄想患者には「自立的で頑張ってきた人が多い」と言う。それは新たな人間関係に葛藤する関係障害であり自己主張だというのだ。「年寄りの色ボケ」といった揶揄とは対照的に、これらの解釈からは、老いゆく個々人の陰影が浮かび上がる。

家族だけで抱え込まずに

そこが必要になるのは、早めの受診だ。それでもできれば、的確な診断と適切な処置が施せる、高齢者に詳しい精神科医に。「高齢者には通常の向精神薬の処方箋が全然役立たないこともある。薬の追加減にも経験が必要」と川崎さんは言う。

とはいえ第一歩は、ごくふつうの常識と見やりがある医師探しかもしれない。葵さんが勧めるのは、病院の規模や知名

度以上に医師の人物を見ること。患者本人に気を配り、家族との連携にも前向きな医師を、自分の目を頼りに探すことだ。ただ最近、葵さんは、やがて母に訪れるであろう痴呆にどう向き合えばいいか悶々としてしまうことも多いという。

嫉妬妄想への、医療の先にある処方箋としては、先の小澤さんも三好さんも、「高齢者が持つ人間関係の中で、家族の占める割合を減らすこと」だと語る。老夫婦で閉じた環境にある人ほど、夫婦関係への執着は高まりやすい。ここは友人や近所の人、あるいは介護のプロの力や知恵を借りたい。男性ヘルパーを家庭に入れてみたり、デイケアに誘ってみたり、本人がデイケアに行きたがらないなら、「ボランティアとして行ってもらえばいい。そういう参加を引き受けてくれる所は、探せば結構ある」と三好さんは言う。せっかく、認知症の前兆や訪れを見逃さずに捉えられたのだ。それを吉と転じる展開を掴めたら、どんなにいいだろう。冒頭に紹介した、マサカリで夫を殴った妻は、精神鑑定の結果「妄想性障害」と診断され、処分保留で釈放、措置入院となった。数年前から夫の浮気を訴えていたという彼女は、大変な代償を払って治療とケアの途に就いたことになる。

必要になるのは、早めの受診。病院の規模や知名度以上に、患者本人に気を配り、家族との連携にも前向きな医者を探すこと



葵さんのささやかなサイトは、今日も当事者の心をつないでいる。マサカリ事件を「年寄りの色ボケ」と感じた人は、ぜひお立ち寄りを。それがどんなことなのか、友人の話を聞くように身近に感じ、偏見も消えてゆくはずだ。